

## 接触場面における日本語学習者の調整行動 —「内容調整行動」の分析を中心に—

施信余 (台湾・淡江大学)

### 1. はじめに

接触場面とは、目標言語による母語話者と非母語話者間のインターアクション場面のことである。接触場面において円滑なコミュニケーションの実現を目指して母語話者がとる言語行動を対象に、これまで社会言語学や言語習得研究の領域では多くの研究が進められてきた。また、今まで日本語の意味交渉研究ではタスク中心の研究が主であり、自然場面の会話からの試みはほとんどなされていない。そこで、本発表では、日本語母語話者(以下、NS)と台湾人日本語学習者(以下、NNS)による接触場面での自然会話を取り上げ、遠隔会議システムを利用して行ったコミュニケーションにおいて、コミュニケーション問題を解決するために行われる調整行動にはどのようなものがあり、それぞれの調整行動がインターアクションの中でどのように機能しているかを、NSとNNSによる共同作業という視点から考察することを目的とする。

### 2. 方法

#### 2.1 対象とする会話データ

分析対象としたテレビ会議は、台湾の淡江大学、日本の早稲田大学、慶応大学及び中国の北京大学をインターネットで結び、学生が自ら選んだ興味・関心のあるテーマについて意見交換をし、アジア青年の相互理解を図る活動である。本発表は、2009年10月～2011年1月の間に実施された合計七回の日本語会議を分析対象とした。一回につき、およそ一時間である。会議の様様をすべて録音、録画し、会議終了後、半構造化のフォローアップ・アンケートに答えてもらった。

会話データの文字化は、宇佐美(2007)「改訂版：基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2007年3月31日改訂版」に従って行った。

#### 2.2 調整行動の分類

「形式調整行動」:

「形式的な意味交渉」のために行われ、言語形式の問題を解決するものである。

「内容調整行動」:

「内容交渉」のために行われ、内容を引き出すことに働きかけるものである。

表1 「内容調整行動」

性質	調整行動	性質	調整行動
マーク型	内容確認 要求	調整型	内容確認 応答
	明確化 要求		明確化

### 3. 結果と考察

日本語レベルが低い学習者でも、自分の関心のある内容を語る際、言語ホストになる可能性があり、言語形式上の不足部分が他者の提示によって補われる際、言語ゲストになるというように、言語ホストと言語ゲストの役割関係が交替することがあると考えられる。

また、「形式調整行動」と「内容調整行動」は切り離されて起こるものではなく、密接に関連し、相互に依存している連鎖であることがわかった。

### 4. 今後の課題

本発表は「形式調整行動」と「内容調整行動」の相互依存連鎖に関する分析を試みたが、この観点からの類型化や質的分析はできなかった。複合調整がどのような形で交わされているのかという点は今後の課題にしたい。また、今後は学習者のレベル別による調整行動の相違点についても考察してみたい。

#### 【参考文献】

施信余(2011)「接触場面におけるコミュニケーション調整行動について—日本語母語話者と日本語学習者による話し合いの談話資料より—」『淡江日本論叢』、第24号、p.75-96.